

ほとんどの家庭で、買い置きして冷蔵庫に入れてあるものといえば、牛乳と卵ではないでしょうか。わたしもこの2品がないと落ち着かないので、できるだけ切らさないようにしています。それは子供のころ、母に「牛乳は背を高くする」と言われて以来、毎日欠かさずに飲んでいましたし、卵は料理に使う機会が多いからです。

ところで、人類が牛乳を口にするようになったのはいつごろでしょうか。大昔から家畜として飼育されてきた動物のことなので、その始まりを特定するのは難しいですが、古代メソポタミアの壁画に乳搾りの様子が描かれていたそうです。日本人が知るのは、飛鳥時代に渡ってきた書物からだといわれています。その中では、栄養価の高い薬のような飲み物として紹介され、牛の上手な育て方なども解説されていました。それらは、一部の貴族には広まったといわれていますが、習慣として根付くまでには至らなかったようです。

再び脚光を浴びるのは明治時代になってからです。とはいえ、そのころでも病人や虚弱な小児に与える薬のようなものとして、受け入れられていたとされています。庶民にとっては入手しづらかったのが理由かもしれません。

やがて、北海道の開拓が始まり、新たな産業として国が酪農を振興させると広く一般にも普及していきました。しかし、食の西洋化が進み、料理にバターなどを使うようになっても、飲み物としての人気はそれほど高まることはありませんでした。そこで宣伝用に「背が伸びる」や「栄養価は肉よりも高い」などの言葉が使われたそうです。母の教えが、飲み物としての牛乳を普及させるための、キャッチフレーズと同じだったのには驚きました。